

「……………」

僕は膝をつき、剣を握りしめたまま息を荒げていた。

目の前でサキュバスが優雅に笑っている。紫色の長い髪が、蠱惑的に揺れる。翼と尻尾を優しく動かしながら、彼女はゆっくりと近づいてきた。

「ふふ……可愛い顔ね。もう、立てないんでしょう？」

サキュバスは僕の胸を軽く押した。

抵抗する力が残っていなかった。僕はあっさりと仰向けに倒され、そのまま彼女に跨がれてしまう。

「やめ……っ……！」

僕は必死に身をよじったが、彼女の膝が僕の両腕を押さえつけていた。

サキュバスは上から見下ろし、甘く微笑む。

「抵抗しても無駄よ。もう、君の体は私のものなんだから。」

彼女の指が、僕のシャツのボタンを一つずつ外していく。

冷たい空気が肌に触れるたび、僕は小さく震えた。

シャツがはがされ、続いてズボンも引き下ろされる。

下着ごと剥がされた瞬間、僕は自分の股間が熱く疼いていることに気づいた。

（……なんで……？）

目の前に広がるサキュバスの裸体が原因だった。

たわわに実った乳房が、重力に逆らって形を保っている。

その先端は淡いピンク色で、すでに少し硬くなっていた。

そして、彼女の脚の間——無毛で、つるりとした秘所が、僕の視界を奪う。

「……っ！」

肉棒が、勝手に反応して跳ねた。

まだ何も触れられていないのに、先端から透明な液がにじみ出している。

サキュバスはそれを見て、くすくすと笑った。

「ふふっ……見て。」

まだ何もしないのに、こんなに硬くなってる。私の体、気に入ってくれたのね？」

彼女は僕の股間に視線を落としたが、指は一切伸ばさなかった。

代わりに、彼女の両手が僕の胸に伸びてきた。

「ん……？」

指先が、僕の左の乳首に触れた。

くすぐるように、ゆっくりと円を描く。

「ひっ……!?!」

小さな刺激なのに、予想外に鋭い快感が走った。

僕は思わず体を跳ねさせた。

「ふふ……敏感なのね、ここ。」

冒険者なのに、こんなに乳首が弱いなんて……可愛い。」

サキュバスの指が、右の乳首にも這い上がってくる。

両方の乳首を同時に、くすぐるように撫でられる。

「や……っ……やめて……!そこは……っ……!」

僕は腰をよじって逃げようとしたが、彼女の膝が僕の体をしっかり固定していた。

指は容赦なく、乳首の周りをなぞり、時には爪の先で軽く弾く。

「んふ……硬くなってきたわよ?ほら、摘まんであげる……」

指と指の間で、敏感になった乳首を優しく摘ままれる。

軽く、しかし確実に、ねじられるような刺激。

「ひゃっ……! あっ……っ!」

僕は思わず声を上げてしまった。

ペニスは相変わらず何も触れられていないのに、乳首からの刺激だけで先端がびくびくと脈打っている。

サキュバスは満足げに微笑みながら、指の動きをさらに丁寧にしていく。

「ふふっ……抵抗する力が、どんどん抜けていく……乳首をこうやって丹念に愛撫されると、女の子みたいに感じちゃうのね。ほら、もっと敏感にしてあげる。」

彼女の指が、乳首の先端を軽く抓み、ゆっくりと引き伸ばす。
そしてまた、優しく転がす。

「んっ……あっ……はあ……っ……」

僕は歯を食いしばって耐えようとしたが、声が漏れてしまう。

もどかしい、甘い快感が胸の奥から広がっていく。

ペニスは疼いているのに、一切触れられない。

そのフラストレーションが、逆に乳首の感覚を鋭くさせていく。

サキュバスは僕の顔をじつと見つめながら、囁いた。

「抵抗しなくていいのよ。ほら、もっと素直に感じて？」

指が再び乳首を摘み、軽く捻る。

同時に、もう片方の乳首を爪で優しく刺激される。

「ひっ……！ ああ……っ……！」

僕は背中を弓なりに反らせた。

股間の熱はますます強くなっているのに、そこには一切の手が届かない。

ただ、乳首だけが、容赦なく、ねつとりと愛撫され続けている。

サキュバスは満足そうに息を吐き、僕の耳元で甘く囁いた。

「ふふ……もう、目がとろけてるわ。乳首だけで、こんなに感じちゃうなんて……これから、もっともつと、女の子みたいな快楽を教えてあげるからね？」

彼女の指が、再び乳首を優しく、しかし執拗に刺激し始める。

僕はただ、齒を食いしばりながら、そのもどかしい快感に身を委ねるしかできなかった。

II

サキュバスは僕の体に跨がったまま、ゆつくりと上体を傾けてきた。

彼女のたわわな胸が、重く揺れる。甘く香る吐息が、僕の顔にかかる。

「ふふ……もう、こんなに硬くなってる。可愛いわね。」

彼女は僕の左の乳首に、熱い吐息を吹きかけた。

次の瞬間――

「んっ……!!?」

柔らかく湿った感触が、乳首を包み込んだ。

サキュバスの舌が、れろっ、とゆつくりと這い上がってくる。

「れろ……れろれろっ……」

熱い舌が、敏感になった乳首を丁寧に舐め上げる。

先端を丸く包み込み、ねっとり転がすように刺激してくる。

「ひゃっ……!! あっ……っ!!?」

僕は思わず声を上げてしまった。指で触れられるのとは全く違う、ねっとりとした熱い感触。

舌の表面のざらつきが、乳首の先端を執拗に擦る。

サキュバスは満足げに目を細めながら、僕の右の乳首にも唇を寄せた。

今度は優しく吸い付きながら、舌先で小さく弾く。

「ちゅぱ……れろっ……んふ……ふふ、こんなにビクビクしてる。女の子がされるみたいに乳首を舐められてるのよ?」

「や……っ、そんな……っ!」

僕は腰をよじって逃げようとしたが、彼女の膝が僕の体をしっかりと押さえつけている。

逃げ場はない。

サキュバスは片方の乳首を舌で舐め続けながら、もう片方を指で優しく摘まんだ。

そして、交互に刺激を加えてくる。

「れろれろっ……ちゅぱっ……ほら、両方同時に感じて?女の子がサキュバスに責められるのって、こんな感じなのよ。それにしても、相当敏感な体してるわね。」

舌が乳首を包み込み、じゅるっ、と音を立てて吸い上げる。

同時に、もう片方の乳首を指で軽く捻られる。

「ひっ……!! ああ……っ……!!」

僕は歯を食いしばった。

ペニスは今も何も触られていないのに、先端から透明な液がとろとろと溢れ続けている。ただ乳首を舐められ、吸われ、転がされるだけで、下半身が熱く疼き、頭の中が甘く溶けていく。

サキュバスは僕の乳首を舌で丹念に転がしながら、囁いた。

「れろれろれろっ……ちゅぱっ……じゅるっ……」

彼女の舌遣いがさらにねっとりとしてきた。

乳首の周りを丁寧に舐め上げ、先端を舌で押すように刺激する。

時折、軽く歯を立てて甘噛みしながら、吸い上げる。

快楽が、胸の奥からじわじわと広がっていく。

もどかしくて、でも確実に高まっていく感覚。

「んっ……あっ……はぁ……っ……!!」

僕はもう、抵抗する言葉すらまともに発せなくなっていた。

ただ、彼女の舌と唇に身を委ね、甘い喘ぎを漏らすだけだ。

サキュバスは僕の乳首を舌で包み込み込みながら、ゆっくりと吸い上げた。

そして、舌先で執拗に先端を刺激し続ける。

快感が一気に高まった。

体が熱くなり、頭の中が真っ白になりかける――
その瞬間。

サキュバスは、ぴたりと動きを止めた。

「――っ!?!」

初めての快楽が爆発する直前で、突然すべてが止まる。

残されたのは、疼くような不完全燃焼の快感だけだった。

僕は息を荒げながら、彼女を見上げた。

サキュバスは上から僕の顔をじっと見つめ、甘く微笑んでいる。

「ふふ……もう少しでイッチャウところだったわね。でも、まだダメよ。」

彼女は僕の乳首から唇を離し、優しく指でなぞった。

「君……女の子の素質、かなりあるみたい。」

サキュバスは僕の胸に軽くキスを落としながら、続けた。

「その気があるなら」

言葉の意味を深く擦り込むように、間を置いて。

「私の同族にしてあげられるわよ?」

「……え……?」

僕は息を飲んだ。

「そうすれば、胸だけじゃなくて……他のところにも、女の子の快楽をたっぷり教えてあげられる。今みたいに、もどかしくて、切なくて、でもたまらない快楽を……全身で味わえるようになるわ。」

彼女の指が、再び僕の乳首を優しく摘まんだ。

「どう？興味持ってくれたかしら」

僕は必死に首を横に振ろうとした。

しかし、言葉がうまく出てこない。

サキュバスはくすりと笑い、ゆつくりと上体を起こした。

そして、僕の視線を自分の体へと誘導するように、ゆつくりと自分の胸を両手で持ち上げた。

たわわに実った乳房が、指の間からはみ出す。

淡いピンク色の乳首が、僕の視界を捉える。

さらに彼女は、ゆつくりと脚を開いた。

そこには――

つるりと無毛で、わずかに愛液を滲ませた秘所が、僕の目に焼き付く。

「ほら……見て。」

サキュバスの声が、甘く耳に溶け込む。

「女の子になったら、ココの快樂も味わえるの」

その瞬間――

サキュバスの瞳が、妖しく光った。

魔眼。

僕は、逃げようとした。

しかし、すでに遅かった。

彼女の瞳に視線を捉えられた瞬間、頭の中が甘く溶けていく。

抵抗しようとした意志が、みるみるうちに溶かされていく。

「ふふ……もう、逃げられないわよ。」

サキュバスは優しく微笑みながら、僕の乳首に再び指を這わせた。

「これから、ゆっくりと……墮としてあげるからね？」